

国立国語研究所学術情報リポジトリ

近代対訳コーパスにおける日韓語彙の諸相：
文体の異なる対訳コーパスの比較を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002778

近代対訳コーパスにおける日韓語彙の諸相 -文体の異なる対訳コーパスの比較を通して-

張 元哉（韓国・啓明大学）¹

1. はじめに

現代日韓の語彙（特に漢語）は、日中や韓中よりもその類似性（同形率）が高いことが知られている。これは、近代以降に韓国が語彙交流の相手を主に中国から日本に変えたことによるものであろう。実際、現代日韓の語彙の同形率の高さ（約90%前後）が近代にさかのぼるとそれほどの高さ（約60%）ではないこと、また日韓の語彙交流が始まった19世紀末以降、現代語に向かって同形率や日本製漢語が同様の増加曲線を描くことなどがわかっている（張2000、2003a）。

このように近代以降の新漢語の増加と輸入は現代日韓の語彙形成に影響を与えており、それは単語レベルだけではなく、語彙や表現のレベルにも及んでいたと考えられている。そうすると、これまで知られている現代日韓の語彙の量的な構成の類似点や相違点は近代語にはどうであったかという疑問が浮かぶ。ところが、これまでの日韓の近代語研究は、語彙交流の側面から、どのような語がどのように造語され、どのように交流したかについての研究に重点が置かれ、もちろん日韓の語彙交流においてさまざまなことがわかるようにはなったが、日韓の現代語より同形率（類似性）が低かった、近代日韓の語彙における量的な構成や分布についてはあまり知られていないようである。

そこで、本稿では、近現代的な語彙的要素が混在し、語彙交流の初期である、19世紀末・20世紀初期の文体の異なる日韓対訳コーパスの比較を通して、語彙量、語種、品詞、語構成などの観点から近代日韓の語彙の諸相を探ることを目的とする。

ただし、今回の調査は、資料の制約と限られた調査量の問題などもあって、近代日韓の語彙の様子が十分に捉えられるまでには至っていない。また計画されていた調査がまだ完了していない途中報告であることも断っておきたい。

2. 調査資料と調査方法

近代の日本語と韓国語という二国間の語彙の様子を探るために、注意しなければならないのが、資料の時期、文体（ジャンル）と調査基準であろう。まず調査資料について見てみよう。

2.1 調査資料

日本語と韓国語の語彙を対照するには、資料の時期や文体という条件が同質なものでなければならないことはいうまでもない。しかし、近代という時期は、日韓ともに文体やジャンルの概念が確立しておらず、近代を文体の実験期とまで言うほどである。また、時期の問題も、たとえば日韓の新聞や雑誌の語彙を調査するにしても時期的に資料の有無やずれの問題が生じるなど、同質の調査はそう簡単ではない。これらの問題を十分に考慮しないと、調査結果が日韓の違いなのか、時期的な違いなのか、文体の違いなのかがよくわからなくなる恐れがあるからである。

それで、本稿では、近代という時期をこれまで指摘されてきた日韓の語彙研究の時期の区切りを踏まえて1910年代前後までにし、文体やジャンルの問題を解決するために日韓の対訳資料を使うことにする。近代における日韓対訳資料は、文体を考慮し、

¹ Chang_wonjae@hotmail.com

金秉喆（1975）²、李漢燮（1985）、李建志（2000）などの研究を参考にした。

2. 1. 1 文語体の資料³

日本の資料：『西洋事情』（福沢諭吉、1866-1870）

韓国の資料：『西遊見聞』（兪吉濬、1895）

『西遊見聞』（以下、K西遊）は、福沢諭吉のもとで就学した韓国最初の留学生である兪吉濬の啓蒙書であり、それ以前とは違ったハングル漢字混用体として後代の文体に大きな影響を与えたものである。『西遊見聞』の構成と内容は『西洋事情』（以下、J西洋）と似ており、全20編の中には著者が著述した部分と『西洋事情』から翻訳した部分があるという（李漢燮1985）。本研究では翻訳された『西洋事情』の日本語と翻訳した『西遊見聞』の韓国語を調査対象とする。以下は、そのリストである。

『西洋事情』	『西遊見聞』
初編卷之一「政治」	第五編「政府의 治制」
外編卷之二「政府の職分」	第六編「政府의 職分」
初編卷之一「兵制」	第十三編「泰西軍制의 來歴」
初編卷之一「病院」	第十七編「病院」
初編卷之一「博物館」	第十七編「博物館及博物園」
初編卷之一「蒸氣機関」	第十八編「蒸氣機関」

ただし、本稿での調査報告は、上のすべての編までは調査できておらず、「外編卷之二「政府の職分」 - 第六編「政府의 職分」」を除いた範囲での結果であることを言うておく。今後調査できていない編はもちろん、同じ文体に属する別の言語作品も調査する予定である。

2. 1. 2 口語体の資料

日本の資料：『文七元結』（幕末～明治初期？）

韓国の資料：『東閣寒梅』（1911）

『東閣寒梅』（以下、K東閣）は、当時翻訳家として活躍した玄公廉の作品であり、日本語と韓国語がパラレルに書かれている特徴がある。落語・人情本の『文七元結』（以下、J文七）を原作に翻案（地名と人名だけを変えている）したもので、日本語の部分は『文七元結』の口演速記をもとにしているが、どの速記かはまだ不明のようである（詳細は李建志2000を参照）。

本調査では、『東閣寒梅』（1911）の日本語と韓国語（『日鮮語新小説 東閣寒梅』（玄公廉、文明社）を対象とし、発表者が電子化したものを使うことにする。

今回の調査資料における文体と時代の関係は以下のとおりである。本調査は主に近代日韓の文語体と口語体の違いを対照しているが、近代語の位置づけのために現代語の調査と比較することもある。

² 金秉喆（1975）によると1895年から1910年までに刊行された韓国翻訳文学の79作品のうち日本語からの直接翻訳や重訳された作品が54作品があるという。

³ 『西洋事情』は、岡島昭浩氏のホームページ（<http://www.ne.jp/asahi/nihongo/okajima/bungaku.htm>、黄美静氏の作成）から、『西遊見聞』は李漢燮氏のホームページ（<http://nihon.korea.ac.kr/>、リンク切れ）からダウンロードした。

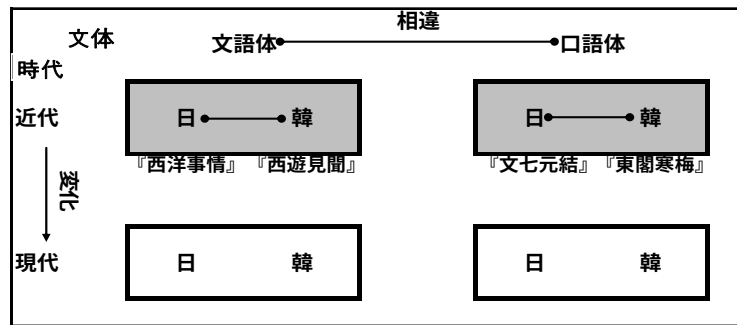


図1 文体と時代における日韓の調査対象コーパス

2.2 調査方法

2.2.1 調査単位の設定

本調査の調査単位は、日本語と韓国語において同じ基準で、比較的に調査者のゆれの少ない調査単位であること、本稿の調査目的の一つである語構成の調査ができること、本調査の結果と先行調査が比較できることという条件として設定した。長い単位としては、日本語は文節、韓国語は語節（文節と同様）単位を採用する。切り分けられた文節（語節）から日本語は助詞・助動詞・記号を、韓国語は助詞・語尾・記号を取り除いた部分を1単位語とする。

以下は本調査対象の調査単位の例示である。

J 西洋

往昔 | 欧羅の | 諸国は | 封建世禄の | 制度を | 以て | 臣下を | 養ひ、 | 各国の | 帝王 | 互に | 相攻め、 | 国内の | 貴族 | 互に | 相闘ひ、 | 専ら | 武を | 重んじて | 文を | 勉めず、 | 字を | 知る | ものは | 唯 | 僧徒のみ。

K 西遊

泰西軍制의 來歴

往古 | 歐洲諸國이 | 封建과 | 世祿의 | 制度로 | 以· 야기 | 臣下· | 養· 고 | 各國의 | 帝王이 | 互相 | 攻撃· 며 | 國中의 | 貴族이 | 互相 | 競争· 니 | 是故로 | 武藝· | 重히 | · 고 | 文字· | 輕히 | · 지라 | 文字· | 解· · | 者· | 宗教의 | 敎正에 | 止· 고 |

2.2.2 調査単位の原則

1単位の長さや幅の詳細な原則は、基本的に国立国語研究所（1987）『雑誌用語の変遷』の「長い単位」に従い、韓国語も該当するものはこれによる。この細則と異なるものや韓国語において注意が必要と思われる語は、以下のとおりである。

- ①文末の「ものか、ものだ、わけだ、ことだ、ところだ」などの下線の語は、1単位語として扱い、実質名詞と別見出し語にする。
- ②「お店、お客」などの「お～」は、1単位語とし、「店、客」と統合しない。
- ③「（～ては）いけない、いかない、ならない」は、1単位語とし形容詞にする。韓国語の「안된다, 못하다, 못되다」も1単位語とする。その他は「副詞（안, 못）+動詞」に切る。
- ④「お～する」は、1単位語とする。これに対応する、韓国語の尊敬の接辞の시(shi)が付いた「가시다」も1単位語とし、「가다」と統合しない。
- ⑤「を以って、における、において、について」などは、本動詞と別の見出し語にする。韓国語も同様に扱う。
- ⑥「急に、楽に」などは、形容動詞の語尾「に」として扱うが、「誠に、実に」な

どは、辞書に見出し語として載っている場合、1単位語とし副詞にする。

- ⑦「ている、である、てみる、てしまう」などの補助動詞は、本動詞と別見出し語にする。韓国語も同様である。
- ⑧韓国語の「하다」は、「する」の意味と、引用（言う）の意味として別見出し語にし、補助動詞の場合は、⑦と同様に扱う。
- ⑨日韓の品詞の違いによるものは、そのまま尊重する。例えば、「～たい」（助動詞）-「싶다」（形容詞）については、前者(日本語)は助動詞なので扱わないが、後者(韓国語)は扱う。
- ⑩単位語としての判断材料とした辞書は、日本語は『広辞苑』（第6版、2008）『新明解国語辞典』（第6版、2005）、韓国語は『ヨンセ韓国語辞典』（1998）『標準国語大辞典』（1999）である。

3. 日韓の語彙量の対照

3. 1 近代における文体別の日韓の異なり語数・延べ語数

『J西洋』・『K西遊』と『J文七』・『K東閣』の異なり語数と延べ語数は以下のとおりである。

表1 近代における日韓対訳コーパスの異なり語数・延べ語数

文語体	J 西洋	K 西遊	口語体	J 文七	K 東閣
異なり	973	1194	異なり	1281	1257
延べ	1948	1988	延べ	3628	3848

上の表1からわかることは、文語体においては異なり語数・延べ語数ともに韓国のほうが多い反面、口語体においてはそうではないということである。ただ、口語体の語数から見てわずかな違いなので、あまり日韓の相違がないかもしれない。語数の違いについては、中野洋（1976：21）では「翻訳される側とする側とでは延べ語数もかわろう。される側よりする側の方が延べ語数が多くなるかもしれない。」という指摘があり、表1の語数の違いもそのように解釈できるかもしれないが、李鐘洙（2010）の聖書の調査（韓国：旧訳1911-日本：文語訳1917）や張元哉（2004）の日韓対訳新聞の調査はそれぞれ第3国語と韓国語が原典であり、韓国語の語数が日本語より多い結果になっている。このことから考えると、語数の多少は必ずしも翻訳の方向によるものではないようである。

近代の口語体において『J文七』の異なりが若干多いが、「お～、～様(さん)、ある・御座る、する・致す、お～になる、お～する（致す）、お～なさる（下さる）」などの待遇表現が韓国語より多いと考えられる。

3. 2 使用率順異なり語数の累積使用率の対照

では、文体別に使用率順異なり語数に対する累積使用率を見てみることにする。それを図示したのが以下の図2である。

図2からわかることは、今回の狭い調査範囲でのことではあるが、口語体より文語体において日韓の累積使用率の違いが目立ち、韓国語のほうが日本語より累積使用率が低いことである。累積使用率は高頻度語群の使用率が影響を与えているので、日韓の高頻度語群における文体的な違いを綿密に考察する必要があると思われる。

文語体における累積使用率が韓国のほうが低いことは、現代の日韓対訳新聞の調査でも同様な傾向であるが、近代語よりその格差は小さいこと、β単位の短い単位の調査では高頻度語群では韓国語の方が累積使用率が高くなる（張元哉2003b）ことから高頻度語群での時代的变化の様子を捉える必要もあると思われる。

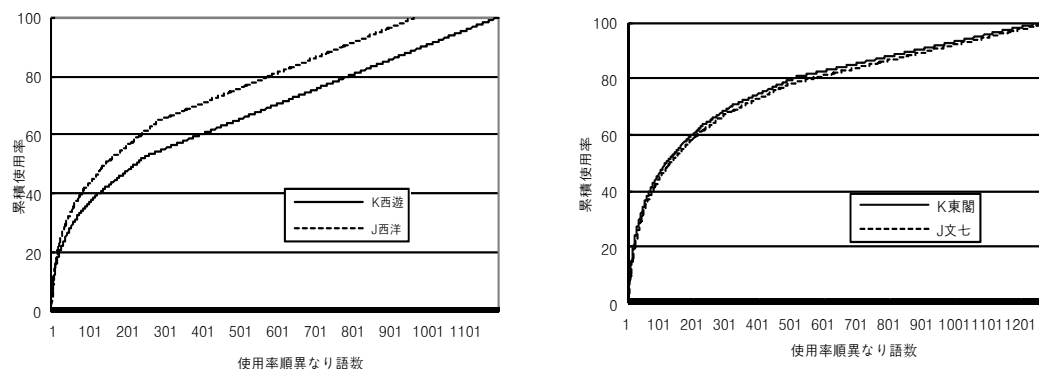


図2 近代における文体別の日韓の累積使用率

これまでの言語間の累積使用率（カバー率）の調査では、中野洋（1976）の『星の王子様』の6ヶ国語版（日、英、独、仏、西、葡）で、日本語が一番累積使用率が低いとされており（助詞・助動詞を除く）、韓国語との比較はされていない。語彙的にも統語的にも類似している日本語と韓国語の比較こそ累積使用率の分布の違いが浮き彫りにできると思われる。現在日韓それぞれ現代語の均衡コーパスが整えられており、語彙量における日韓の位置づけや記述の精密化が期待されるところである。

4. 日韓の語種構成の対照

文体別に語種に分けて集計したのが以下の表2と図3である（延べ語数）。語種の略称は、和語・固有語（固）、漢語（漢）、外来語（外）、混種語（混）である。

表2 近代における文体別の日韓の語種構成

文語体	固	漢	外	混	計
J 西洋	1043	741	21	143	1948
%	53.5	38.0	1.1	7.3	100.0
K 西遊	33	1299	1	655	1988
%	1.7	65.3	0.1	32.9	100.0

口語体	固	漢	外	混	計
J 文七	2936	536	11	145	3628
%	80.9	14.8	0.3	4.0	100.0
K 東閣	3019	507	1	312	3848
%	78.5	13.2	0.0	8.1	100.0

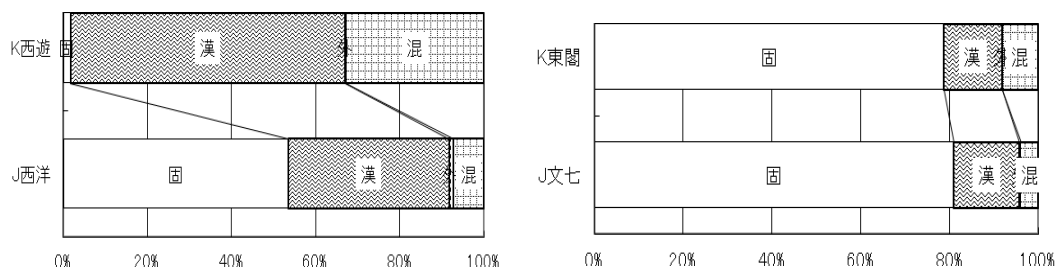


図3 近代における文体別の日韓の語種構成

表2と図3を見ると、まず、文体によって近代日韓の語種構成の相違が相当異なることがわかる。口語体では、日韓の語種構成がかなり類似していて、混種語が韓国語

に多い（2倍ほど）ぐらいであるのに対して、文語体では、日韓の語種構成の相違が激しく、日本語は固有語、韓国語は漢語と混種語が非常に多い傾向が目立つ。韓国語の固有語は、1.7%を占めるに過ぎず、固有語をできるだけ排除した様子が見える。

近代の文語体における日韓の語種構成の相違が、以下の図4で示した現代語の日韓の語種の違いと類似している（張元哉2004）が、近代語のような格差はそれほど大きくないことがわかる。このことは語種における近代から現代への変化として捉えられる。

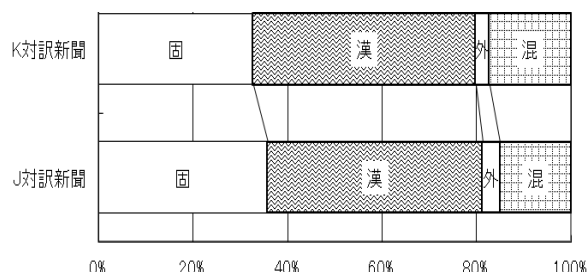


図4 現代日韓の対訳新聞における語種構成

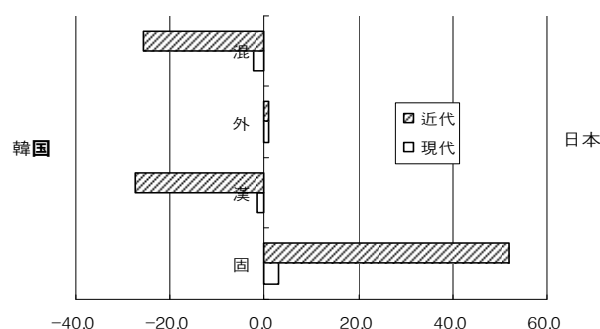


図5 近代と現代における日韓の語種の比率の差

図5は、近代と現代における日本語の語種の比率から韓国語の語種の比率を引いた数値を図示したものである。たとえば、次のようになる。

- ・近代の固有語：日本語53.5% - 韓国語1.7% = 51.8%
- ・近代の漢語：日本語38.0% - 韓国語65.3% = -27.0%

つまり、近代語から現代語に向かって日韓の語種構成の類似性が高まったということである。このような現代語への変化の裏づけとして日本語では国立国語研究所(1987)、韓国語では韓榮均(2009)の調査結果をみると次のようになる。

まず、国立国語研究所(1987)は長い単位での「中央公論」の雑誌を調査したもので、和語と漢語は年によって増減の変動があるものの、一定の傾向は見られないこと、外来語と混種語は増えていく傾向が見られると指摘している。一方、韓榮均(2009)は文節単位での調査であり、19世紀末からの漢字ハングル混じり文の新聞の論説を調査したもので以下のような調査結果を示している。

表3 19世紀以降の韓国新聞の論説における語種の変化(%)

語種	品詞	1890年代	1909年	1920年代	1930年代
漢語	代名詞	2.04	3.71	1.48	0.31
	連体詞	3.70	5.25	2.81	1.63
	一字名詞	11.82	9.11	3.42	4.40
混種語	一字漢語hada	10.81	12.5	5.17	1.90

表3からいくつかの品詞の漢語と混種語が減少していることがわかる。以上の先行論文の調査結果をまとめると、日本語は混種語が増加し、韓国語は漢語

と混種語が減少していることから、近代語から現代語への日韓の語種構成の変化の様子が推測できる。

5. 日韓の品詞構成の対照

品詞分類の基準は、国立国語研究所（1964）『分類語彙表』に従う。文体別の品詞構成は以下のとおりである。

表4 近代における文体別の日韓の品詞構成

文語体	体言	用言	相言	他	計	口語体	体言	用言	相言	他	計
J 西洋	1147	537	215	48	1948	J 文七	1651	1154	646	177	3628
	58.9	27.6	11.0	2.5	100.0		45.5	31.8	17.8	4.9	100.0
K 西遊	1182	503	268	29	1988	K 東閣	1600	1213	858	168	3848
	59.5	25.3	13.5	1.5	100.0		41.6	31.5	22.3	4.4	100.0

表4からわかるように口語体のほうが文語体より比較的に日韓の品詞構成の違いが目立ち、口語体では日本語は体言類が多く、韓国語は相言類が多いことがわかる。これは、日本語が名詞志向表現、韓国語が動詞志向表現を好むことの現われであろうか（林八龍1995、金恩愛2003など）。すなわち派生名詞、複合名詞、動作性名詞や動名詞が主語、目的語、修飾語、述語に立つ際に、日本語の名詞が韓国語の動詞・形容詞になりやすい傾向があるということである。

たとえば、今回の調査資料からの例を見てみると、「不思議さ→異常である、夫婦別れをしない→夫婦が別別に別れなくて、若者が→若い人、心配を→心配して、お帰りを→帰ってください」などである（日本語→韓国語の日本語直訳）。また、これらの名詞が文語体よりは口語体によく出現する(?)ために口語体により品詞構成の相違が現れるのであろうか。

以下では日韓の口語体の相違が見られる体言類、相言類を中心に考察を行うが、比較のために文語体も合わせてデータをあげることにする。

5.1 文体における日韓の体言類と相言類の内訳の対照

文体別に体言類と相言類の内訳を示すと以下のようである。

<文語体における体言類と相言類の内訳>

	体言類			相言類	
	J西洋	K西遊		J西洋	K西遊
名詞	1039	1087	形(形動)	69	91
代名詞	35	18	副詞	89	83
動名詞 ⁴	15	58	連体詞	57	94

<口語体における体言類と相言類の内訳>

	体言類			相言類	
	J文七	K東閣		J文七	K東閣
名詞	1260	1342	形(形動)	224	285
代名詞	248	190	副詞	320	433
動名詞	110	45	連体詞	102	139

⁴ ここでの動名詞とは、日本語は動詞の連用形の転成名詞やそれを含む合成語、韓国語は動詞にロ(m), 기(ki)の名詞化接尾辞をつけた語である。

口語体において「J文七」に体言類が多いのは、「代名詞」と「動名詞」の多さによるものであり、「K東閣」に相言類が多いのは、「形(形動)」「副詞」「連体詞」の多さによるものであることがわかる。文語体では、口語体に比べ量的に日韓の違いは見られないものの、同様の傾向が見てとれる。但し、動名詞は「K西遊」に多く、副詞は日韓ともにほぼ同じ量である。

近代韓国における文語体の動名詞の多さは、当時のハングル漢字混じり文（漢文直訳）の特徴であり、典型的な名詞用法の語というよりも述語部分に現れる語が多く、以下の例のように「漢語+함+이라」（21回、波線）という形式のことが多い。

例：宗教信服 此・各人이其信服・・崇旨・崇奉・기許・고政府가是・勿關・야民間의軋轢・・紛爭을窒制함이라（日本語原文：信教人々の帰依する宗旨を奉して政府より其妨をなさざるを云ふ）

この使い方が韓国の現代語ではあまり使われなくなっていることを考えると、動名詞は、現代語の文語体と口語体においても日本語の方が多いのではないかと推測される。

続いて、文体別に体言・相言類における各品詞の異なり語数と用例を見てみると、表5のようになる

表5 文体における日韓の体言・相言類の異なり語数と用例

品詞		文語体		口語体	
		J西洋	K西遊	J文七	K東閣
体言	代名詞	3語: <u>此</u> (30)、私(3)、 <u>此</u> 処(2)	1語: <u>此</u> (18)	30語: <u>何</u> (40)、 <u>其</u> れ(38)、御前(36)、 <u>此</u> れ(26)	24語: 나(47)、너(32)、무엇(18)、 <u>이</u> 것(13)、 <u>그</u> 것(12)
	動名詞	11語: 競り売り(2)、妨げ(2)、妨げ(2)	43語: 有함(3)、謂함(2)、各伸함	75語: 使い(5)、御払い(5)、取り返し(4)	34語: 보기(3)、하시기(3)、돌아오기(2)
相言	形容詞	27語: 無い(27)、ごとし(9)、多い(4)	71語: 無하다(14)、같다(2)、過하다(2)	88語: 様(27)、無い(20)、ない(14)	127語: 없다(29)、같다(21)、그렇다(10)
	連体詞	5語: <u>其</u> の(42)、 <u>此</u> の(10)、大いなる(2)	3語: <u>其</u> (80)、 <u>彼</u> (1)	19語: <u>此</u> の(35)、 <u>其</u> の(28)、 <u>彼</u> の(7)	15語: <u>그</u> (49)、 <u>이</u> (47)、 <u>그런</u> (11)
	副詞	-	-	142語: どうも(31)、マア(19)、どう(17)	171語: 참(48)、좀(18)、참말(14)

()の数字は頻度

表5の異なり語数からもすでに述べた傾向とほぼ一致しており、日韓の各品詞における語の種類にもその違いが現れている。

ここで注目すべきことは、文語体も口語体も日本語は代名詞（これ、それ）が多く、韓国語は連体詞（이(この)、그(その))が多いことであり、また連体詞においては特に日本語の「その」より韓国語の「그」が多いことである。

前者は、日本語の『J文七』では代名詞（それ）で現れるものが、韓国語の『K東閣』では「이(この)、그(その)+名詞（人、時間、場所）」に対訳される例（14例）があるからである。

J文七：それがマアあんなに大きくなったんだものね。（八）

K東閣：그·기가참그리케커젓스닛가웅（その子供が本当にそんなに大きくなったんだものね。訳は筆者、直訳）

後者は、指示詞の用法を大きく現場指示と非現場指示に分けた場合、非現場指示における日本語はコ・ソ・ア系が現れる反面、韓国語は이(こ)、그(そ)系しか現れない（宋晩翼1991）からではないかと思われる。コ系と이(こ)系は日韓同様に対応しているのでソ・ア系と그(そ)系の違いであろう。上の例からすると、波線の部分の「あんな」が「그렇다」（そうだ）に対応するようなものであろう。

6. 日韓の語構成の対照

近代日韓の文語体と口語体の語構成の構成は以下のとおりであり、2次結合以上のものは、最終結合を見て判断した。また、「お～する（いたす）」（23語）はここでは複合動詞に入れた。

表6 近代における文体別の日韓の語構成

文語体	単純	派生	複合	計	口語体	単純	派生	複合	計
J 西洋	1650	182	116	1948	J 文七	3014	338	277	3628
	84.7	9.3	6.0	100.0		83.1	9.3	7.6	100.0
K 西遊	1158	772	58	1988	K 東閣	3189	378	272	3848
	58.2	38.8	2.9	100.0		82.9	9.8	7.1	100.0

表6からわかることは、第一に、文語体に日韓の語構成の相違が認められ、日本語は単純語と複合語が多く、韓国語は派生語が多いということである。第二に、日本語は文体における語構成の比率がほぼ同じであるが、韓国語は文体によってかなり異なっていて、文語体に派生語の比率が多いということである。

では、文体ごとに複合語と派生語についてもう少し詳しく見ていくことにする。

6. 1 文体別の複合語の内訳

複合語のうち、主な品詞を文体ごとにあげると以下のとおりである。

・文語体の複合語の内訳

J西洋：①名詞99回（73語）：共和政治(5)、人々(5)、蒸気機関(5)、立君独裁(3)、禽獸魚虫(2)、西洋諸国(2)、自主任意(2)、為替問屋(2)、フランス病院(2)、各々、鎧兜、見世物、工作貿易、貴族名家

K西遊：①名詞58回（46語）：蒸気機関(4)、歐洲諸國(2)、禽獸蟲魚(2)、都下人民(2)、自由任意(2)、天下各國(2)、泰西各國(2)、熊虎獅犀、各其各目、古今物産、歐洲全幅、宮闕近處、飢寒疾苦、每兩六分

・口語体の複合語の内訳

J文七：①名詞71回（54語）：親子(3)、見ず知らず(2)、小間物(2)、二親(2)、行く末(2)、縞柄(2)、家々

②動名詞46回（31語）：取り返し(4)、勤め奉公(3)、身寄り(3)、心持ち(3)、人通り(3)、夫婦別れ(2)

③動詞141回（107語）：受け取る(6)、申し上げる(6)、飛び込む(5)、行き立つ(3)、しやがる(3)、見捨てる(2)

K東閣：①名詞112回（73語）：계집아해(-兒孩)(8)、큰돈(5)、고공사리(雇工-)(4)、품속(4)、거짓말(3)

- ②動名詞：2回（2語）：다다려오기, 잊어졌음
 ③動詞128回（65語）：돌아가다(9)、돌아오다(9)、가져오다(6)、지나가다(6)、내놓다(5)、들어가다(5)

文語体における『J西洋』に複合語が多いのは、複合名詞によるもので、『K西遊』より異なる語数も多く、そのほとんどが漢語である。一方、口語体における複合語の比率は表6からだとほぼ同じであるが、その内訳を見ると、『K東閣』には複合名詞が多く、『J文七』には複合動名詞、複合動詞が多い。

複合名詞の場合は、文語体では日本語に漢語が多い傾向にあるのに対して、口語体では韓国語に固有語と混種語の複合名詞が多いことがみられて面白い。また、口語体の『J文七』に複合動名詞や複合動詞が多いことは、5節で述べた動名詞と動詞の日韓の多少の傾向と前者は一致し、後者は複合において日本語の動詞が多くなるということになる。

これまで日韓の語構成についての調査があまり行われていなかったもので、今回のデータにおける日韓の特徴が当時の言語現象を反映していて一般化できるかということと、現代語との違いなどについては、まだわかっていない。今後多くの調査が必要であるゆえんである。

6. 2 文体における派生語の結合パターン

まず、文語体の派生語である。『K西遊』に派生語が非常に多く、以下に派生語における品詞と語種の関係をみることにする（○：和語、●：漢語、◎：外来語）。

<文語体の派生語>

	J 西洋	K 西遊	
名詞	109	114	
(●+●)+●	30	48	J:世界中、動物園、天主教 K:世界上、動物園、基本形
●+(●+●)	5	7	J:新發明、全世界、總病院 K:大都會、大旨趣、新造物
(◎)+●	5	0	J:フランス帝
動詞	73	473	
(●+●)+○	63	269	J:一變する、發明する、改正する K:收聚하다、發用하다
(●)+○	2	202	J:議する、害する K:至하다、爲하다、作하다
○+(○)	3	0	J:相攻める、相戦う
副詞	0	25	
(●+●)+○	0	14	K:是故로、如此히、輕蔑히
(●)+○	0	9	K:順히、重히、輕히
形容詞	0	87	
(●+●)+○	0	56	K:口虛하다、輕便하다、過度하다
(●)+○	0	29	K:無하다、近하다、難하다

文語体における『K西遊』の派生語の多さは、動詞や形容詞の「一字漢字・二字漢字+hada」によるものであることがわかる。これは、4節の語種構成の特徴とつながるものであり、「漢字+hada」による語の表れは当時の文語体の特徴でもある。この造語法は韓国語の現代語に向けて減少する（4節）。名詞における各パターンは大差ない。

<口語体の派生語>

	J 文七	K 東閣		J 文七	K 東閣
接頭辞:	144	10	接尾辞:	86	279
名詞			名詞		
お(ご)+名詞	112	0	語基+さま(さん)	31	5 J:娘さん K:주인님
○+ (○)	52	0 J:御金、御店	語基+さ・ki	6	46 J:可愛さ K:보기
○+ (○+○)	6	0 J:お屋敷	(○)+○	7	14 J:奴等 K:그놈께
●+ (●)	8	0 J:御礼、御縁	(●+●)+●	11	7 J:年小者 K:輕薄兒
○+ (●)	7	0 J:御客、御宅	(●+●)+○	6	6 J:女郎屋 K:雇工꾼
お(ご)+動名詞	28	0 J:御払い御詫び	動詞		
動詞			語基+するhada	21	161 J:反拗 K:생각하다
お(ご)+動詞	14	0 J:御言う御出づ	形容詞		
			語基+hada	0	32 K:未安하다

次は口語体の派生語の日韓の傾向である。口語体の混種語は、全体的には日韓の差が見られなかったが、詳しく見ると、『J文七』は「接頭辞+語基」が多く、『K東閣』は「語基+接尾辞」が多い。日本語の「接頭辞+語基」には待遇性の接頭辞に固有語が付いたパターンが圧倒的に多く文語体ではあまり現れないパターンであり、韓国語の「語基+接尾辞」は文体の違いとは関係なく語基にhadaが付いた動詞と形容詞が多い。

ところで、『K東閣』に名詞化の接尾辞「기 (ki)」が付いたパターンが多くみられるが、すでに述べた日本語に（複合）動名詞が多いことと、その数から考え合わせると、日本語の動名詞は、単純語の動詞の連用形とそれを含んだ複合語のパターンが多いことになる。

7. おわりに

以上のように近代語における日韓の語彙をいくつかの観点から眺めてきたのであるが、調査を行うに当たって、資料の選定や調査単位の長さや幅の問題などについて悩み、限界を多く感じた。

資料の選定については、現代語のようにジャンルや文体が確立されていないことはもちろん、当時期の日韓における資料の多少や時期のずれの問題で同質の日韓の語彙の比較に注意を要するところが多くあったからである。そこで本調査では、日韓の対訳資料を選定したのであるが、対訳資料においても翻訳の方向や量による問題があり、近代語の日韓の語彙を十分に反映しているかという疑問も残る。

調査単位については、二言語間の違いを明らかにするためには同じ調査単位の設定が必要であり、できる限り日韓の調査単位の設定の違いが調査結果に及ばないように注意を払ったつもりであるが、今後検討すべき問題もいくつかあるかと思っている。

そのほかにも日韓の対訳コーパス構築の技術的な問題や形態素解析の可能な有無と精度の問題もあった。今後対訳コーパスとこれまで構築された近代以降の日韓のコーパスとの位置づけや日韓の近代語彙の調査方法における課題を解決しなければならない。

近代語における日韓の語彙研究は、語彙交流の研究を除けばあまり行われておらず、計量的な語彙の分析はいうまでもない。現代語より比較の日韓の類似性が低かった、近代語の日韓の語彙の特徴を明らかにすることは、近代以前の日韓の語彙の様子がわかることであり、また、現代語への変化を捉えられることにもなるのである。

これまで十分に構築されていない近代以降の日韓のコーパスを作成しつつ、近代語の共時的研究と、現代語への通時的研究を進めていきたい。

文 献

- 韓榮均 (2009) 「文体 現代性 判別의 語彙的 準拠와 그 變化-1890년대~1930년대 논설문의 한자어 사용양상을 중심으로-」 『口訣研究』 23
- 金恩愛 (2003) 「日本語の名詞志向構造 (nominal-oriented structure) と韓国語の動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」 『朝鮮學報』 188
- 金秉喆 (1975) 『韓国近代翻譯文學史研究』 乙酉文化社
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』 秀英出版
- 国立国語研究所 (1987) 『雑誌用語の変遷』 (国立国語研究所報告89) 秀英出版
- 宋晩翼 (1991) 「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究 - 「コ・ソ・ア」と 「이・그・저」 との用法について - 」 『日本語教育』 75
- 田中牧郎 (2010) 「雑誌コーパスでとらえる明治・大正期の漢語の変動」 『国際學術研究集会漢字漢語研究の新次元予稿集』
- 張元哉 (2000) 「19世紀末の韓国語における日本製漢語-日韓同形漢語の視点から-」 『日本語科学』 8
- (2003a) 「現代日韓両国語における漢語の形成と語彙交流」 『国語学』 54-3
- (2003b) 「現代日韓語彙の対照研究-対訳コーパスを資料に-」 『日本學報』 (韓国日本学会)55 - 1
- (2004) 「조사단위의 길이와 현대 한일어휘」 『日本學報』 (韓国日本学会)61-1
- 中野洋 (1976) 「「星の王子さま」6か国語版の語彙論的研究」 『計量国語学』 79
- 飛田良文 (1973) 「現代漢語の源流」 『言語生活』 259
- 前田富祺 (1984) 「語種構造の漸次相」 『日本語学』 3-9
- 李漢燮 (1985) 「『西遊見聞』の漢字語について-日本から入った語を中心に-」 『国語学』 141
- 李建志 (2000) 「海を渡った人情噺-朝鮮開化期の文学『東閣寒梅』と「文七元結」-」 『江戸の文事』 ぺりかん社
- 李鐘洙 (2010) 『韓・日 翻譯 聖書의 語彙 比較 研究-1900年 以後 刊行된 「로마서」를 中心으로』 韓南大學大學院韓日語文學比較學科博士論文
- 林八龍 (1995) 「日本語と韓国語における表現構造の対照考察 - 日本語の名詞表現と韓国語の動詞表現を中心として - 」 宮地裕・敦子先生古希記念論文刊行会 (編) 『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』 明治書院
- 손세모돌 (1996) 『국어보조용언연구』 한국문화사